

鳥取学シンポジウム

8月21日（土）、昨年度に続き、鳥取学検討委員会主催による鳥取学シンポジウムをハワイアロハホールにて開催しました。講師に吉本哲郎氏（地元学協会事務局長）を招き基調講演をいただいた後、県内の実践者を招いたパネルディスカッションを行い、具体的な意見交換を行っていただきました。

基調講演「鳥取の元気をつくる地元学」



■講師 吉本哲郎氏（地元学協会事務局長）

■プロフィール

1948年生まれ。宮崎大学農学部卒。同年水俣市役所都市計画課、企画課、環境課、農林水産課を経て現在水俣市教育委員会生涯学習課長。

1997～1999まで熊本大学非常勤講師

■主な著書・雑誌記事等

『私の地元学』

『風に聞け、土に着け 風と土の地元学』

今日皆さんにお伝えすることは、幾つかありますが、基本的に自分は、やったことしか話せません。だからやってきたことの中で、「そうか」と気がついたことをお伝えしたいと思います。

○ムラを元気にする視点「村まるごと生活博物館」

最初に、この村まるごと生活博物館というものを、2002年8月5日から始めました。『元気な村』というのを作ろうということで、やりました。元気な村には3つの元気がありまして、まず1つ目は『人が元気』ということです。次に『地域が元気』、これは海と山と川です。それから『経済が元気』です。人と地域と経済が元気な村、これは地域でも、町でもかまいません。この企画は地域全体を生活の博物館と見立てます、屋根の無い生活博物館ということです。住人が村を案内をするということになります。

生活学芸員という人がいます。これは、私の造語です。右の方は生活職人。住むには技が必要ですね、魚を釣ったり、野菜を作ったりという職人ということで、認定書をあげました。頭石（かぐめいし）というところでやりました。隣が鹿児島県、どん詰りの村で41世帯。住民がここには何にも無いと思っていて沈んでいた村です。ただし住んでいる人は本当に元気がよかったです。この41世帯に8人の生活学芸員がいます。取り組んで半年でこの笑顔が出てくるようになりました。15名の生活職人がいます。漬物、こんにゃく、煮しめ、米作り、鰻取りの立派な生活職人です。この生活学芸員と生活職人には条件が1つあります。それは、「こ

ここには何も無い」と言わないことです。

その為に自分の家と住んでいる集落を調べます。調べるということはどういうことかという
と、まず写真を撮って、それで聞いて、この絵を書いて行くのです。右側に『森の番長、勝目
達男』と書いてありますが。これは林業ですよ、山仕事暦40年の人です。決してヤクザが森
の中に住んでいるわけではございません。これ、怒られるかなと思ったけど、喜ばれたのです。
自分をこういうふうには実は見たことがなかったんですね。いつも見慣れている村なのに写真を
撮って見てみると何処だか分らない、何処だろうという、そういう話です。ここには川の神様
に、竹筒に御酒を入れてお参り、感謝している。これはおそらく魔よけですね。これがあたり
まえかと思うと外部の人から見れば、そうではないですね。

そこで、訪れた人を案内します。来た人に例えば十人来たら、一人千円ずつ貰いますから、
一万円入ります。そのように案内します。案内人一人に千円ではなく、来た人は千円ずつ払う
んです。百人来ても千円ずつ払ってもらいます。その代わり案内人は増えます。

これからが肝心なことです。昼飯に掛かるように、案内をいたします。昼飯代を千円貰いま
す。十人来たら、爺ちゃんが案内して、婆ちゃんが、飯を作って二万円入ってきます。そうい
う仕組みです。けどお互いが喜んでいます。そして一番大事なことはこの売上の一割を村の
活動費に貯めているということです。これが十万円超えました。

やってみて、この左側の方、農業委員の方なんですが、調べて、自分の母ちゃんが作ってい
る野菜畑、家庭菜園にびっくりしているんです。「うちの母ちゃん、こんなにいっぱい作っ
ただろうか、町からお嫁さんに来て、何にも出来なかった、最初は花作りから教えた、いつ
の間にかこんなに作れるようになった」とおっしゃっていますね。そういうことが、たくさん出
てきました。これまで数えたことのなかった自分の庭の植物。ちなみに私の家ではざっと調べ
て84種類ありました。

全国からいろんな方が来るようになりました。ここ
に来た人は全部お金を貰います。ただではございませ
ん。こういうふうには案内いたします。下の写真は水の
駅と書いてあります。私が湧き水の所を案内してもらっ
て、「これはすごい水の駅だ」と言ったら、次に行っ
たら水の駅と書いてありました。その下には長寿の水と
書いてありました。ちゃっかりと長寿の水と書いてあ
りました。だまされる方が悪いと、思っていたら、こ
の水を飲んでいる家は三世代続けて90歳以上の長生きだった、嘘ではなかったのです。村の
人も冗談が好きだなあと思ったけれども、へえと思いました。



神奈川県的女子高生が修学旅行にやってきました。まだ2年も経たないうちに、村のお年寄
り達は張り切りました。女子高生と聞いて、何で張り切るのかと思ったのですが、用意したの
が釣りなんです。女子高生は釣りするのかねえと思ったら、これが一番人気がありました。

次は蔵を改造してレストランにした方です。スローフードな人生というのを書いてイタリ
アのスローフードを日本に紹介をした人です。この人が第1号なんです、ここに泊りました。
「99%ここで取れた物、すごい」と言って、言われた方は「そうなんだ、これはすごいこと
なんだ」と思ったそうです。食べさせてもらったものを、写真に撮って、並べて見てこれを村
の男の人たちに見せました。「これで何にも無いんですか」と、そうしたら村の男の人たちは、

口をぽかっと開けて、「あれ、うちの村の母ちゃんたちの力はすごいんだな」と、こんなことを言ってくれました。これが目に物を見せると言うんです。ものを見せないと言葉では分らないんですね。私はさらにお昼ご飯を食べさせるだけではなくて、庭で売ってくれと言ったんです。そうしたらおばちゃんたちは最初は30円、50円と、気の毒そうに言うんですよ、30円ですよ、今は慣れてきまして、100円、安いから買え、だけど買う人はにこにこして、やっぱりそれでも安いから買ってくれて、ところが村の人はしたたかでしたね。今度は籠を荷造り紐で作りました。これを作って売り始めたんです。どっちがしたたかかというふうに思いましたけれども。

この効果はですね、自分で気付かなかった村の良さを外の人が教えてくれた。それから山を見る目が変わった、食べ物がいっぱいある、今度はあれを食わせようかなあと。私の町の若者がこんなことを言っています。「コンビニが欲しい」って。私は言い返しました、「ほう、海と山と川は無料のコンビニたい」と、「何で取りに行かん、時々泥棒と言われるけれどね」と言ったんです。

山を見る目が変わる、季節ごとに食べ物がやってくるという山の豊かさ、これが非常に大事です。お婆ちゃんはこのことを言いました。「生き甲斐になったとよと、今までは家にいるだけだった、自分が作った物を美味しい美味しいと食べてくれる」。村が化粧をし始めました。外から来る人が見るから、見られる方は一生懸命化粧をし始めました。だから古タイヤとか、放置されていたのが、いつの間にか、片付けられたり、草刈をやっていたりというのが出てきました。学生が絵地図を作って送ってくれるようになりました。物作りが進んだというのは意外な効果です。左の方がこの荷造り紐で作ったんですが、大事なことは、これを置いていたら文句を言う人が出て来ました。花柄を入れてくれとか、絵をもう少し長くしてくれとか文句を言ったら、作ってくれるようになったんです。そうしたら文句を言った人は1個だけではなくて、10個ぐらい買って配り始めました。分ったことは、作る関係を作るということです。要するに文句を言ってくれるお客さんを大事にする。しかし大事なことは直接に聞けば腹がたつということ、間にいる人が大事です。

これは水俣市役所の農林水産課のカウンターです。これも分っていただけたと思いますが、農林水産課のカウンターは籠の直売所が変わってきました。右側が豆腐作りセット、これは全国でいろいろできていますが、破材を利用して作って見たら結構売れるようになりました。ある時、家に帰りましたら、これが9つ洗って干してありました。うちのおふくろが買っていました。加工所ができて、弁当を作っています。元気村加工所となっています。

やったことというものの1つがこの生活博物館なんですけれども、予算ゼロでできるんです。ゼロというよりも、写真代はかかりました。ゼロというよりも村の人が儲かっていく、少しでも良いから小銭が入る仕組み、これが大事だと思います。鳥取の元気を作るというふうに題をさせてもらいました。どこでも水俣なら水俣とか、熊本なら熊本とかでも、よろしいんでしょうけれども、ここという、ここに生きています。そしてここに私たちは生きていますが、私たちは住んでいるここというものを知っているのかということですね、最近これが気になっています。鳥取に学ぶということが鳥取学だと思うんですが、例えば智頭町だったら、智頭学です、智頭に学ぶ、智頭町に学ぶ、で良いと思うんです。鳥取のそれぞれの地域、市町村がありますけれども、さらに小さな集落もございますけれども、その地域の力です。それからそこに住んでいる人の力、これを引き出すというのが、一言で言えば、その地元で学ぶ地元学です。おそ

らく鳥取に学ぶ鳥取学の目的もそうでしょう。まず力を引き出す。

『教育』という言葉がございます。英語で『エデュケーション』と言うらしいですが、原語をたどって行くと、ラテン語にぶち当たります。その原語の意味は『引き出す』という意味です。教育というのは、最初は引き出すことから始まっている。だけどもいつの間にか私たちは、『教える』と誤解をしてしまっていますが、そこに住んでいる人、地域の持っている力、これを引き出すことから、鳥取に学ぶという元気を作るというのを始まるというふうに私は思います。ある物を探して磨かないかぎり、無い物を探しても、しょうがないだろうというのが、この始まりになります。

○他地域から見る農村が持つ魅力

他の例を少しお話しします。山口県が美しい村づくりをやるというから、「それは危ないな」と思って行きました。何故危ないか、後で話しますが。ここは漁村から、山の上まで棚田なんです。結論だけ言いますと、これは苛烈な生産風景です。江戸期において八万貫もの負債を村田清風という人が藩政改革、財政改革でこれを返してしまいます。その時に四白政策、四つの白い政策、それは和紙、塩、米、蠟です。全部白いから四白政策といいます。当時の苛烈な生産風景がこの風景です。

これは東北の農村の風景ですが、明治の初期にイザベラバードという女の人が旅をします。そして山形のおそらく長石だと思いますが、こんなことを言っています、「日本人は朝から晩までせっせと働いて世界で1番美しい国を作っている」これをイギリスに紹介いたしました。大きく影響したのはガーデニングです。ガーデニングとは、庭ではございせん。農村風景なんです。しかもそれは日本です。ところがそれを何を勘違いしたのか、不勉強な日本人がイギリスに行ってガーデニングを勉強してテレビの中で庭弄りをやっています。もうちょっと調べてくれと言いたくなります。

なぜイギリスに行くのでしょうか、何故、日本の農村に行かないのでしょうか。何かおかしいです。もっと私たちは日本が持っている、すごい財産を外国経由でしか見ていないという、そして外国経由でも見ていないという、何か恥ずかしいことを、まだやっているのではないかなと思います。

結果的にこの田舎というのが否定されていきますが、もう良い所も、悪い所も必ずありますから、悪い所を1箇所見つけて、全部を否定したのが、今までの田舎ではなかったのかなあと、思います。どうもそういう傾向ある、過剰な反応が起きています。

福岡の金崎漁港というので、6月12日、13日に魚祭りというのがありました。森千鶴子という人が漁法、それから船の上の食べ方、浜での食べ方、それから家での食べ方、魚、それを四十二枚のパネルに発表しました。そしたら何処で食べられるの、食堂で食べられるのかという反応が起きて、えらい騒ぎになってきています。ここに『宴会の町、金崎実演中』という写真がありますね。これは要するにイベントで飲んでいるだけなんですけれども、この漁師の気質というのを調べると面白いんですが、ものすごい仲間意識です。お分かりだと思いますが、仲間の船が難破したり、漂流したり、いろいろとトラブルが起きると、近くの者がすぐ行きます。沖で座礁になったら、嵐の中でも、飛び込んで行くのが漁師仲間です。だから本当に生死に近い関係、大漁だったら、それを喜び飲みます。大漁でなかったら、まあ良いかと、また飲みます。これはすごいなと思います。これをお客さんが何処で食べられるのとかを結構聞

くようになりました。そこで旅館でも食べられるようにしようとかいう動きが始まりました。

これはインドネシアのバリ島です。これはホテルなんです。バリ島に世界でトップクラスのホテル、それは棚田にあります。そこには3つの特長があります。一つ目は耕作放棄地の棚田をホテルが買い占めました。そして無料で村の人に貸しています。作った米はもちろん村の人のものです。何故か、米を作るのが風景であるからです。2つ目はこのホテルを突き切って道が川に行っています。川にですね、そこにヒンズーのお寺があります。ゆえに祭りの時はホテルの敷地を突き切っていきます。お祈りに行き交う村の人たちの生活が風景である。これを大事にしている。3つ目はこのホテルが社員教育をしています。いらっしゃいませとか、そういう教育ではないです。この村の生活文化をすばらしいということを教育しています。これが世界でトップクラスのホテルなんです。値段もトップクラスなんです。それは私たちが見慣れているこの鳥取や、この付近の漁村が、トップクラスのホテルを作れる素地になる可能性があるということです。

わたしも今、ある人と日本のどこかにトップクラスのホテルを造ろうということで、今、呼びかけています。大事なことは生活文化を大事にしているか、居、食、住、食べるとか、衣服を作るとか、織るとかも含めて、昔からある祈りとか、感謝とかをやっているか。そういうのが大事なんです。これがトップクラスなんです。

○考える力が元気を生む

もう一度、『三つの元氣』の話しです。この経済が曲者です。私は経済が三つあると思っています。一つは貨幣、お金の経済。次が共同する経済。次が自給自足の経済。私たちが豊かさを感じ取れなくなったのは、昔からたくさんあった共同と自給自足を忘れ、お金だけが豊かさだと思い込んでいるからだだと思います。私たちはもっと共同と自給自足、家庭菜園やら、海と山と川から何かを得るとか、これをもう少し目を向けたらどうかなあと思います。ただお金が要らないということではないんです。それは違いますね、必要です。当たり前が必要です。

良い地域は良い自然、良い仕事、良い習慣、住んでいて気持ちが良い、少しのお金でもニコニコ笑って暮らせる生活の技術を教えてくれる学びの場があることが必要だと思います。それから友達が3人は居ること。自分のことを思っている友達が3人は居る、これは過疎の村に残っているおばあさんの言葉でわかると思います。「この村では喧嘩もしたけど、良い友達ができたよ。息子が町に住んでいてこっちに来い、町に移って来いと言うけれども、そこでは良い友達ができるかい、できないって、ここは喧嘩もしたけれども、良い友達ができたよ」。私たちはそこに、もう少し耳を傾ける必要があるのではないかと思います。

別の方は自然と生産と暮らしがつながっていて、常に新しいものを作る力を持っていると言いました。この自然と生産と暮らしがつながっているのが、良い町だというのは分りやすいですが、常に新しいものが作る力を持っている、これが良い町なんです。実はここが問題です。常に新しいものを作り出す力を持っていない場所が衰退していくのです。だから新しいものを作る力を作るという、これが大事だと思います。

考えてみますと、地域とか店、商店街、企業もそうですが、衰えていく、衰退していく原因は新しく作っていない商店街、お店も物を買って、物を売っているわけではなく、作って売っている、そこの作る力の衰退、これが商店街の衰退かもしれません。静岡の商店街がおもしろくなったのは、ランドセル屋さんが、止め金が壊れるとか、止め難いとか、そう言われてメーカー

に持って行ったけれども、誰も応対してくれなかったから、仕方なく自分でランドセルを工夫して作ったら、売れ初めて、他所の町からも注文がきて、その次にどうしたかというと、1つの店で1つの新しいものを作る運動をやったら、商店街に人が結構来るようになったというのがあります。やはりこれも作る力でしょう。一村一品運動というのが、大分でやっていますが、一店一品運動をやっている。これが大事だと思います。

作る力の衰えは実は考える力の衰えなのです。考えていない、では何で考えてないのかと考えてみたら、調べていないことがわかりました。だから地元学ぶというのは、調べる、考える、作るというのを繰り返します。逆に言えば、作る為に調べます。実は何も無いところから新しいものは生まれません、新しいものはある物とある物の新しい組み合わせです。無い物と無い物を組み合わせてもしょうがないです。だからこのある物が問題になってくるんです。ある物探しが必要なんです、よく間違えるのは非常に口幅った言い方かも知れませんが、資源を探すとか、宝を探す、これは間違えます。何故かと言ったら、家には資源が無い、家には宝は無いという反応が返ってきます。それはですね、その宝という物は他所に無い物を探すから無いという、だけど何処でもある物を探せばいいじゃあないですかね、マイナスのある物はあるんですよ、困っている、余っている、捨てている物、水俣で、あるプラスチックの圧縮梱包機を作らないといけないはめになって、見積を取ったら、7,700万、びっくりしました。私は怒りました。捨ててあるユンボのジャッキを持って来い、鉄工所があるから、組み合わせでこれを作らせようと、1,400万で済みました。五分の一です。そしてその機械が売れました。困った、余った物を組み合わせただけで簡単にできます。だから家でも長短合わせて有る物を探すことが必要になります。そして組み合わせるといふことの他に本当はひねるとか、変えるとか、発想法がございますので、何かに使ってください。

私の知り合いの料理人が、こんなことを言ってくれました。冷蔵庫の扉を開けてあれが無い、これが無いと文句を言って料理をするのが、2流の料理人。冷蔵庫を開けてある物でやるのが1流だ。私は地域の扉を開けてあれが無い、これが無いと言って地域づくりをやるのを2流だと思います。地域の扉を開けてある物でやるのが、1流だと思いますが、私は付け加えて、それを黙ってやるのが、超1流だと思うようになりました。そしてそれは普通の人です、地元学ぶ地元学は、普通に黙ってやっている人達に光を当てていきます。



○ある物探しから見つけたこと～自分の足元を知らなかった～

私はこのある物探しを仕掛けたのは、地区の自治的組織に集まってもらって、役場に陳情はしないでくれ、自分達でできることはやってくれというふうに頼んだことに始まります。頼んで猛反発を受けました。どうすれば良いんの、陳情というのは無いものねだり、その反対は自分でやるということだから、ある物を探して磨こうやということ、ある物探しをやったんです。それが地域資源マップという取組みだったんですけれども。だけど私、資源マップの「資源」という言葉を使ったのは間違いでした。今だったらある物探しとします。

次に水の行方を調べました。なぜなら、水に関係しているなあと直感的に思ったからです。ある日調べてみたら、自家水源から、飲み水生活、用水、お風呂の水、使ったのは池に流れて、

たです。自分の家を知らなかったです。それだけではなかったです、親のことを知りませんでした。私は親に話しを聞き直すことから、やりました。ただ親に話しを聞くのはノウハウが必要です。直接話を聞くと喧嘩になりますから、友達に聞かせて隣の部屋で聞き耳を立てて聞いているという、こういうノウハウを使ってください。

2番目が個性の把握が大事だということです。これはかなり急がれます。生涯学習センターでも是非、これを仕掛けていただければと思いますが、自分もしくは住んでいる地域の市町村やら集落です。これを説明すること、これをやってください。かぶれと、拒否これは過剰な反応ですがそれは自分を知らない、地域を知らないから起きる、過剰な反応です。アイデンティティ閉塞症という。このような若い人たちが自分探しの旅に出かけたら大変です。傷つかずに立ち直れるかもうひやひやするんですが、これは簡単です。自分の家と集落を調べさせてから、旅立たせれば良いんです。それをやらないから、傷つきます。

調べてもらったんですが、晩飯うつして、ここの素材は何処から来たか、調べてもらいました。この飯は、米は300m離れた田んぼからやってきた。これは感動しました、これが大事なんです。特徴の無いものねだりから、ある物探し、愚痴を自治に、自分で調べる、何故か調べた人しか詳しくならないからです。植民地にならない、これは外の人だけが詳しくなると経済的な侵略を受けるということです。住んでいる人が調べないと駄目です。生かす為に学ぶ、物作り地域づくり生活づくりをやる、地域作りに加えて物づくりをちゃんとやる、生活づくりをやるということ、もっと言えば物づくり生活づくりをやったほうが良いです。地域づくりまちづくりは誰かがやるものだと思い込んでいます。それから外の人がやり方と、住んでいる人がやるやり方があります。外の人と一緒にやってくださいと言っていますが。だけど外の人には行儀作法があるんですけれども、それは教えない、引き出せということです。驚いて質問をして、引き出してください。あれこれ講釈たれるなということです。私も気を付けているんですが、水俣にも視察にこられる方がいっぱいいらっしゃいます。だいたい昼から来て2時間ぐらいして、ここはこうすれば良いじゃあないですか、何故しないですかという人がいるんです、たまに。私はそんな時は丁寧に追り返します。生意気です。冗談ではないです。三方張りのコンクリートだって、何でそうしたのか調べるんです。それは水を1滴ももらさない、水に苦勞をしたから、三方張りのコンクリートです。それをこれはおかしい生き物の為に良くないとか、簡単に言ってしまう人がいっぱいいらっしゃいますが、おかしいです。それから、分らない主義、間違い主義です。分らないから調べる、それからやっていることは間違いだから、完璧ではないから、少しでも良いから工夫していく、私のやり方は40点主義です。理論は100点をめざします。行動は40点ぐらいで良いんじゃないですか、けどやっているのは完璧でないから、少しずつ良くしていけば良いんじゃないですか、私はそう思います。水俣が取組みが早いのは40点主義だからです。100点ではやりません、これを話すと長くなる、辞めよう、戻してください。

○スローフードを实践すること

こんど水俣に私たちでスローフード協会を設立いたしますが、私はお茶づくりの天野に代表をさせようかと思って画策しております。何故か10月20日にこの天野はイタリアに呼ばれて話しをするからです。スローフード協会から呼ばれます。それほど見事なお茶を作っています。このお母さんは3番目の子どもを産んでからリウマチで家事労働一切できません。だ

から親父が炊事洗濯全部やって子どもを育てて、子どもも小学校に入ったら飯を作るようになりました。だからこの男の料理は来た人に大評判で上手くなって、たまたま紅茶工場の隣に囲炉裏を切ったら人が来るようになったんです。来たら飲むようになって、飲んだら泊るようになって、気の毒だとお礼を置いていくようになって、これが勝手にグリーンツーリズムという実験です。だからお礼を置いていけば良いんです。ここはこの親父とこの息子というか、この家族の人柄というか、これで、やっぱり人がいっぱい来ます。この男は親を説得して無農薬に変えた男です。親をですよ、説得して。中学校の時に親父に腕相撲で勝った。大きくなって親父を変える時は力で変えると決めたと言うのです。案の定大きくなって無農薬でやるようになったら、3年間ものすごい親子喧嘩をしました。親も両方とも知っています。知らない間に農薬をかけている親をもう子どもはぶっ殺すというところまでいきました。それは何故という収穫半減ですから親も必死なんです。ものすごい喧嘩をしました。私は親から相談を受けて息子が悪い、私はそうだそうだといいました。息子は親が悪いだったので、私はそうだそうだといいました。どっちの味方もしません。3年間そうだそうだと聞いていたら、何時の間にか上手くいきました。両方正しいんです、片一方だけ正しいということは無いです。時間が必要です、私はそう思います。

○鳥取の元気をつくる地元学

鳥取の元気を作るとは、まとめになりますが、地域の持っている力、住んでいる人の持っている力を引き出す。それからまず自分からやる、一人から始める、自分の家から始める。それからまず自分が元気になること。最初にやってもらいたいこと、空元気を出せという、空元気でやってください。それから自分と地域を説明出来るようになること、個性です。それからみんなでできるだけみんなで仲間を作って足元を知る、話を聞く、新しくある物を組み合わせる、組み合わせる力は創造する力です。その為に人の話を聞いたり旅に出かけたりするんじゃないですかと思います。それから、最初はお金をかけないでやる。労力というのはお金と時間と労力ですね、取り返しのつく失敗をしましょう。取り返しがつかないのはお金ですから、残ったのは手間と暇です。手間暇かけてやろうというふうに私は思いますし、そういうふうに言います。はい、一点突破ですね、そして全面展開。最初はいろいろやるなと言うことです。力が無いのにいろいろやるから余計駄目ですね。力があるのは合わせてたった一点から突破して行けば全面展開出来ると思いますね。水俣は環境からこじ開けました。そして天野君たちはお茶でこじ開けました。杉本さんという方です。ものすごくいいじめにあわれた方です。お父さんにいいじめ返しはするなと言われ、虐めた人様変えられないから自分が変わると、こうおっしゃったんです、びっくりしました。水俣も世間というものは変えられないからですね、水俣が変わったんだと思います。お嫁さんの話は全部壊れました。就職も駄目になった町です。そして農産物も水俣という名前では売れませんでした、40年間。私たちはそこからはい上がって来ました。しかしそこにはみんなで足元を調べるという、地元で学ぶ地元学があったと思っていただければ。幸いです。どうもありがとうございました。